

ASK?映像祭は今年で19回目で、来年で20周年になる。第一回目から久里洋二、西村智弘、ギャラリーオーナーの木邑芳幸の三人で審査をおこなってきた。長く続いていることにわれながら驚くが、力を入れすぎず、細々と運営していくことが継続の秘訣であろうか。ここ数年はコロナの影響もあって変則的な上映が続いたが、ようやく通常の上映に戻りつつあるようだ。

今年の応募作品は、あえていえば子供が主人公でなんらかの不安をテーマにした作品が多い印象である。単なる偶然にすぎないのだろうが、現代社会の生きづらさを子供に託して表現しているのではないかとも思ったのである。どうであろうか。

大賞は、まちだりなの『ニンジンが待ってくれない』となった。今年の審査で久里さんは、大賞が「該当なし」といつてきた。これははじめてのことだが、だからといって今年の作品レベルが低かったわけではない。まちだりなは昨年も入選していたが、イメージが研ぎ澄まされ、より高度に象徴的なアニメーションとなっていた。独自の世界が構築された完成度の高い作品で、今回の応募作のなかでもっとも大賞にふさわしいと思った。

久里洋二賞は、石塚瑛介の『ever ReDreamer』である。個性を探す旅に出た少女を描いたコラージュアニメーションである。現代の消費社会のなかで、自分を表現することの難しさを描いているのであろうか。西村智弘賞は、いくつかの作品で悩んだが、劉明承の『ストロー』を選んだ。消費衝動をシュールなイメージで描いたアニメーションで、社会的なテーマに真正面から向き合っているところが潔いと思った。ASK?賞には、キム・ハケンの『WHITH PHONE CALL』が選ばれた。小品であるものの、シュールなテーマを巧みに描いていた。初の人形アニメーションというが、なかなかよくできた作品である。

以下は入選作品である。

増山透の『Parking Area』は、ティルトシフトを応用した作品である。ティルトシフトとは、遠くの風景を焦点深度が浅い状態で撮影することで、ミニチュアのような効果をつくる映像である。もともと写真で使われることが多いが、動画は比較的珍しい。ティルトシフトの効果を活かし、ひとつひとつの映像が端正に撮られていて感心した。力量のある作家で、今後に期待したい。大澤慶彦の『私生の殻』は、モノトーンのコマ撮り作品で、手づくり感に好感をもてた。この種の作品にしては長尺で、力作ともいえるが、内容が少々地味なので、もう少し整理したほうが見やすくなるのではないかと思った。

王俊捷の『よだか』は、鳥たちの世界を描いたシリアスなアニメーションで、独自の世界を構築することに成功している。手描きの跡が残る絵の具の質感が魅力的で、色をあえて抑えたモノトーンに近い画面も効果的であった。倉澤紘己の『えんそくだったひ』も独特な質感を強調したアニメーションで、パステル調で統一された色調もうまく合っていた。すでに商業的な分野で活躍している作家で、完成度の高い作品である。

許願の『Sewing Love』は、かなり個性的な絵と動きのアニメーションである。ほのぼのとした展開なのかと思ったら、好きな女性を支配しようとする恐ろしい話で、かなり強烈であった。癖が強いので好き嫌いが分かれるかもしれないが、わたしは好きだった。一方、菅野彩奈の『YUMEMUCHU』は、愛らしく親しみやすいキャラクターのアニメーションである。夢見がちな少女の失恋話だが、へこたれないところがよいと思った。

新海大吾の『ぼくがこわい黒いもの』は、弟（あるいは妹）ができる不安と喜びを表現したアニメーションである。子供の複雑な心情を「黒いもの」に象徴させて描いているところがうまいと思った。クレイアニメーションの技術も高度である。池田夏乃（かの）の

『はなくそうるめいと』は、孤独な少女が話をする鼻くそ（「ぶがちょ」という名前があるらしい）の活躍によって友達ができるストーリーである。鼻くそがやたらとノリのよいギャル風のキャラクターなのが効果的であった。KUWAの『ぞうのかたち』は、性に興味をもつ子供を描いたアニメーションである。難しいテーマだと思うが、象の象徴的な扱い方など語り口の巧みさに感心させられた。

大澤由佳の『ESOTERICISM』と『Traum Albelt』は、いずれも小品ではあるが、3DCGで独自の世界をつくっていた。3DCGは似たようなパターンに陥りがちだが、そうしたなかでこの作品の個性は貴重である。朝倉小冬深（さとみ）は、違うタイプのアニメーションを3つ応募してきたが、『STIL LIFE』が入選した。静物のシルエットと雲を合成したシンプルな構成が成功していて、独特な詩情をつくりだしていた。

石井真衣の『肉にまつわる話』は、肉嫌いの理由をエッセイ的につづったプライベートなアニメーションである。武馬由季の『まわりつきやがって』もエッセイ的なアニメーションで、スマホやSNSをめぐるストレスという現代社会の問題を扱っていた。いずれの作品もアニメーションで自分を対象化する視点が興味深い。

今年の入選作品には、去年入選した作家がけっこういた。大賞のまちだりなをはじめ、入選の新海大吾、倉澤紘己、片山風花がそうである。ASK?賞のキム・ハケンも、もう十年以上も前に何度か入選したことがあった。このようにかつて入選した作家が繰り返し応募してくれるのは単純にうれしい。長く続けていてよかったと思うのはこういうときである。ASK?映像祭は、長年続いている割には地味な存在だし、大したサポートもできていないが、なんらかのきっかけや励みになってくれたらよいと思う。